

委員会行政視察報告書

委員会名	厚生文教常任委員会
出席委員等	竹田 光良 委員長 堀口 和弘 副委員長 山本 優真 委員 河部 優 委員 岡田 好子 委員 梶本 茂躰 委員 和気 信子 委員 田畑 仁 委員 (随員：議会事務局 川口哲生)
実施年月日	平成29年7月13日(木)～14日(金)
視察先	福井県 坂井市(7/13) 福井県 勝山市(7/14)
視察項目	坂井市：教科センター方式による学校づくりについて：丸岡南中学校現地視察 勝山市：小学校における英語教育の取り組みについて
視 察 内 容 ●福井県坂井市(7月13日) 福井県坂井市議会 古屋副議長から歓迎の挨拶を受けた後、視察案件である「教科センター方式による学校づくりについて」坂井市立丸岡南中学校を見学 松嶋校長より説明を受ける。 はじめに、古屋副議長の挨拶の中で、市の概要として、坂井市は福井県の北部に位置し、平成18年3月20日に坂井郡の三国町・丸岡町・春江町・坂井町、4町が合併して誕生したところであり、平成29年4月1日時点の人口は、92,478人、世帯数は31,104世帯、面積は、209.67㎢である。また、市の南部を九頭竜川が、東部の森林地域を源流とする竹田川が北部を流れ、西部で合流し日本海に注ぎ込んでいる。さらに、中部には福井県随一の穀倉地帯である広大な坂井平野が広がり、西部には砂丘地および丘陵地が広がっている。また、土地利用を地目別にみると、田畑が約36パーセント、山林が約31パーセントを占めており、豊かな自然環境に包まれている。 道路網については、東部に北陸自動車道・丸岡インターチェンジや国道364号、西部に国道305号、中部に国道8号、主要地方道福井金津線(嶺北縦貫線)および主要地方道福井加賀線(芦原街道)が走るなど、主要な基幹道路が南北方向を中心に発達している。また、鉄道網は、市の中央を南北に走るJR北陸線が2駅、えちぜん鉄道三国芦原線が9駅設置されているとの説明を受ける。 続いて、丸岡南中学校における「教科センター方式による学校づくりについて」 1、丸岡南中学校は、坂井市松岡町が福井市のベッドタウン化により人口が増え続けたことにより、丸岡中学校が県内最大規模の生徒数1,000人を越える過大規模校となり、その過大規模校の解消と、一人ひとりの生徒に気配りができる教育環境の充実を図るため、丸岡中学校を二校に分離し、新設校として平成18年4月に丸岡南中学校を開校したところである。 2、「学校づくりの指針として」、①自主的に学ぶ意欲を育む環境づくり②気持ちよく学校生活を送ることができる、ゆとりと潤いのある生活環境づくり③地域に根ざした学校づくり④地域に開かれ、地域と連携する学校づくりの以上4項目を掲げ、その内、自主的に学ぶ意欲を育む環境づくりの取り組みとして、教科教室型学校運営、つまり「教科センター方式」の採用に至ったところである。	

3. 教科センター方式の内容としては、従来の特別教室に加えて、国語、英語、社会などの教科もそれぞれの専用教室を持ち、教材や教科に関する掲示板の整備により、教科の学習にふさわしい環境を構成することにより、生徒は授業ごとに各教科専門の教室へと移動して授業を受け、各教科の教室の周囲には教科の資料やパソコン等を設置したメディアセンターが一体として整備されており、教科の先生も授業時間以外はメディアセンターにいて、生徒が休み時間等に気軽に先生と会話をしたり自主学習ができるなど、積極的な意識や態度を育てる環境が整っている。

4. 各教室の横には、クラス専用の居場所となるスペースが設けられており、授業ごとに生徒は教室を移動することから、個人の荷物を入れるロッカーを整備している。

以上のことから、丸岡南中学校では、従来の受動的な学習を廃止して、生徒が自らの意思で各教科の専門教室へと移動し、自主的に学習する力を養うことを目的として生徒主体・生徒参加型の学校づくりを目指している。

また、併せて、丸岡南中学校では、教科センター方式以外の取り組みとして、「スクエア：各学年1学級ずつを基本として構成する生活集団」と名付けた異学年縦割り集団による教育活動に開校当初より取り入れており、生徒は、清掃、給食など、授業以外の活動をスクエア単位で取り組んでいる。教室の配置も学年ごとではなく、スクエアごとに配置し、3年生の学級数をもとに、決定されたスクエアには、それぞれ「花鳥風月宙」と名づけ、学級長とは別に、各スクエアの3年生、2年生からリーダーが各1名ずつスクエア内の選挙により選出し、これらの生徒で生徒会執行部が構成されている。

日々の活動の他には、スクエア単位で行う教育活動が、年間を通してカリキュラムに組み込まれており、他の学校ならば学年単位で取り組むような体育祭・文化祭なども、生徒・教員ともにスクエア単位で取り組んでいると説明を受ける。

以上の説明を受け、質疑に入りました。

質疑としては、

1. 教科センター方式やスクエアを導入するに当たり、一学年4クラスということが、ポイントと考えるが、例えば5クラス以上の学校であれば、現場の意見としては良いと考えるか。

丸岡南中学校では、教科センター方式で学習して、スクエア制で生徒指導をするといういうことを基本にして学校運営に取り組んでおり、一学年のクラス数については、マックス5クラスがベストであると考えている。

2. 新しい取り組みをすると研修等が増えることにより、教師の多忙化ということが報道されていると思うが、その辺の対応状況はどうか。

教員の仕事については、ここまでがゴールという判断をするのは中々難しいところであるが、管理職：校長としては、時間を区切るように指導を徹底していくべきであると考えている。例えば、中学校では、学校の授業が終わってから部活の指導をし、その後に、教材研究や保護者の対応となると、勤務が午後7時、8時となることは事実である。しかし、丸岡南中学校のように、新しい取り組みをやっているから多忙であるとは考えていない。

3. 教科センター方式やスクエアを実践する中で、授業がはじまっているのに、教室に入らない生徒は、丸岡南中学校ではいますか。

直近の2年から3年の間では、教室に入らず授業を受けないという生徒はいないのが現状である。ただ、仮に、教室に入らない生徒対策として、教科センター方式を導入すると、教室を移動するということから考えると、なお難しい問題が出てくるのではないかと考える。

4. スクエア制で3年生が1年生の学習面をサポートするということはあるですか。

昨年より学習面ではなく、「道徳」において、スクエア単位で「スクエア道徳」ということを行っており、その際のアンケートの感想を見ると、1年生からすれば3年生の方が、自分たちより凄いなという印象があるとの感想があることから、学び合いということより、認め合いということが顕著にあらわれていると認識している。

5. 教員の授業評価は行っているのか。保護者評価、子供からの評価など。

子供からの評価はとっている。例えば、数学の授業が「分かる」、「分からない」ということまで書いていることから、管理職：校長としては、この意見を注視しているところである。

6. 教科センター方式を導入し、学校施設も充足していることで、丸岡南中学校に行きたいという生徒があると考えるが、これは教育格差に繋がっていないのか。

坂井市では、市内の全ての小中学校において、耐震関係で大規模改修が終了しており、市内の中学校の教育環境については、差異はないと考えている。また、福井県は田舎であり、地元意識があることから一部、スポーツをする生徒の中で、どここの中学校に行きたいということは、聞いたことがあるが、現状としては、区域外就学ということはない。

以上が、質疑の主な内容であり、坂井市における視察の概要となります。

●福井県勝山市（7月14日）

福井県勝山市議会 帰山議長、そして梅田教育長から歓迎の挨拶を受けた後、視察案件である「小学校における英語教育の取り組みについて」学校教育課の担当職員より説明を受ける。

はじめに、帰山議長、梅田教育長の挨拶の中で、市の概要として、勝山市は、昭和29年9月1日に大野郡北部に位置する勝山町、平泉寺村、村岡村、北谷村、野向村、荒土村、北郷村、遅羽村、鹿谷村の1町8箇村が合併して勝山市が誕生したところであり、平成29年3月31日時点の人口は23,978人、世帯数は8,002世帯、面積は、253.88㎢である。また、市の中心は福井市の東方約28キロメートルの地点にあり、東南は大野市に、西南は福井市、北西に坂井市、吉田郡永平寺町、北は石川県に隣接している。

市の周辺は1,000メートル級の山々に囲まれ、中心部は県下最大の河川である九頭竜川の中流域に位置している。市街地は九頭竜川の流れに沿って形成された河岸段丘に位置し、明治以来の地場産業である繊維産業を基幹産業とした商工業と、古くから農林業が盛んな水と緑の豊かな田園都市である。

また、昭和63年に、手取層群の1つ北谷町杉山で、1億2千万年前の肉食恐竜の化石が発見されて以来、この地域一帯は全国でも貴重な恐竜化石の宝庫としてクローズアップされ

るようになり、平成19年には、日本で初めて恐竜の皮膚痕化石が発見され話題となったところであると説明を受ける。

続いて、「小学校における英語教育の取り組みについて」

福井県勝山市では、文部科学省の英語教育強化地域拠点事業の採択を受け、小・中・高等学校、13校の研究校において平成26年度より小中高一貫した英語教育の改善に取り組んでいる。13校ある研究校の中でも、特に9つの小学校における教員の指導力向上を図るための校内研修の取組みと福井県教育委員会及び勝山市教育委員会による支援体制について説明を受ける。

1. 福井県教育委員会の取組みとして

- (1) 英語教育強化地域拠点事業の取組みにおける最重点課題を「授業改善」とし、各小学校で年2回の授業公開、公開に向けた全校体制での事前検討会、及び授業後の研究協議会を実施する。1つの小学校につき年間4回の訪問、9つの小学校で年間計36回の訪問を行うことにより、各小学校の教員と継続的に関わり支援することができる。
- (2) 研究校が「授業改善」に向けた研究を進めるに当たって、県教育委員会担当指導主事による支援や指導助言のほかに、福井大学、仁愛大学、敦賀市立看護大学といった地元大学の英語教育を専門とした教授からも継続的に指導を受ける。
- (3) 県全域が統一された方向性で小学校英語教育を推進していくため、勝山市教育委員会の担当者と頻繁に電話やメールでやり取りし、時には双方が訪問し、互いに事業の進捗状況を確認し合うことで、成果や課題を共有している。

2. 勝山市教育委員会の取組みとして

- (1) 勝山市教育委員会では、「英語教育をぜひ勝山市の特色に」との市長の意向を受け、教育長をはじめ職員全員が「英語教育を変える」という強い願い・意思をもってスタートしたことで、市内各学校の積極的な取組みとその方向性を決定付け、大きな成果につながったと考えている。
- (2) 勝山市教育委員会の担当指導主事が果たす最大の役割として、県教育委員会と各学校の間で意見の調整役となり、それぞれの業務の軽減を図ったことであり、各学校の進捗を把握し、成果や課題をまとめて県教育委員会に報告するとともに、県教育委員会の意向を伝達するなど、各学校での負担を軽減し、教員が研究に集中できる環境づくりに大きく貢献している。
- (3) 県教育委員会の担当指導主事が英語の専門的分野についての指導助言を行う一方で、勝山市教育委員会の担当指導主事は、教科・領域の枠組みを超えた観点から授業づくりについての指導助言を行っている。その結果、ある小学校では、3年生の算数で学習する「表とグラフ」の単元と、外国語活動を連携させた授業が生まれたところである。

3. 小学校英語教育の早期化・教科化に当たっての課題と取組み

- (1) 小学校教員が自身の英語力と英語の指導法に不安をもっていることから、中学校英語担当教員1名を専科教員として小学校に配置するとともに、市費で2名の支援員を併任することにより、3名が全小学校を巡回しながら、学級担任とティーム・ティーチング（複数の教員が役割を分担し、協力し合いながら指導計画を立て指導する方式）を行い、教科の専門性を生かした指導を行うとともに、学級担任の英語力や指導力の向上に向けた取組みを行った。
- (2) 専科教員は、教育委員会の担当指導主事と比べ、小学校教員と日常的に関わり、同じ目線で教員の悩みや課題に向き合えることが強みであり、この点を生かすことで、小学校教員の指導力を着実に向上させることができた。

4. 小学校における校内研修の取組み

(1) 管理職を中心とした職員全員で取り組む風土作り

小学校教員の指導力向上を目指す校内研修の推進においては、管理職の強力なリーダーシップや組織マネジメント力が欠かせないことから、研究校においては、管理職自らが積極的に研究に関与し方向性を決定していくものの、研究の具体は、教員の自主性に任せるという風土が根付いており、管理職が異動しても研究が継続している。

(2) 校内研修として

研究校では、福井県教育委員会が作成した「学校全体で取り組む小学校英語教育推進プロジェクト」を参考に教員の英語力と授業力の向上に向けた研修を進めている。

(3) 学校掲示で英語力向上

職員室や特別教室などの表札の下に英語の標記を加えたり、曜日や月を表す英語を階段に掲示したり、或いは、給食時間等に子供たちが行う校内放送で英語を取り入れるなど、授業以外で英語を使う場面を増やす取組みを行う。

以上の説明を受け、質疑に入りました。

質疑としては、

1. 勝山市では、小学校において英語教育に特化して取り組んでいるが、他の教科への影響はでていないのか。

英語教育を進める上で、他の教科には、影響を及ぼさないように十分に配慮した中で、英語の授業に取り組んでいるところである。

2. 小学校での英語教育の取組みとして、文部科学省の事業指定を受け、平成26年から平成30年までの4年間で事業に取り組んでいるが、事業指定が終了した時点で、市単独の事業として行っていく考えはあるのか。

文部科学省の事業として指定されるメリットとしては、英語の専科教員の1名配置と教材等が国の予算でおこなえるということであり、この事業が終わるということで、一番影響がでるのは、英語の専科教員がいなくなることと考えている。出来れば、外国人の支援員さんが現状2名であるが、3名に増やすことができないか。或いは、小学校専門の英語教員を配置することができないか、現在検討中である。

3. 小学校で英語の授業を行う上で、他の教科の時間を割いて行っているのか。

小学校での英語の授業時間としては、3年生4年生は、週1時間、5年生6年生については、国に先駆けて週2時間で行っている。従前5年生6年生は、外国語の学習として、週1時間であったが、現在、総合的な学習時間の1時間を英語にあてることにより、週2時間としている。

4. 教育現場での小学校英語教育に取り組む姿勢、そして市長が英語教育を勝山市の特色としたいとの考え方について説明を受けたが、一方、議会としてはどう考えているのか、分かる範囲で教えて欲しい。

勝山市内には、TOEICを入社条件の必須としている外資系の企業があり、給料体系も良いことから、市長の考えとしては、優秀な人材が帰ってきて欲しい、就職の際には、英語を身につけて帰ってきて欲しいという思いがあります。また、議会としても、英語

を学ぶ場を作ることが重要であると考えている。

5. 各学校で公開授業を年2回されているということであるが、その内容について説明を求める。

本来は、公開授業であっても、日頃の授業風景を見てもらうのが一番良いと考えるが、各学校で、公開授業をする際には、他の学校からも教員等が見学に来るので、良いところを見せたい、学校としても恥ずかしくない授業を見せたいということから、事前に打ち合わせをおこなうとともに、大学の先生の指導を受けながらやっているのが現状である。しかし、基本的には、日頃と変わらない授業風景を見て頂いていると考えている。

以上が、質疑の主な内容であり、勝山市における視察の概要となります。

■総 括

視察については、時間的配分の厳しい日程の中、実施しましたが、市の担当職員による説明に対し、委員から活発な質疑が行われました。また、施設見学も行い、全体的に充実した内容であり、十分に所期の目的を達成することができたと考えております。

今回の視察により得た内容については、今後の市政に反映させるとともに、市の発展につなげていきたいと考えております。

上記のとおり報告いたします。

平成29年7月28日
厚生文教常任委員会
委員長 竹田 光良

(坂井市)



坂井市議会 古屋副議長 歓迎の挨拶



泉南市議会 竹田委員長 挨拶



坂井市立丸岡南中学校 松嶋校長 説明



質疑応答



施設見学



堀口副委員長 お礼の挨拶



丸岡南中学校前

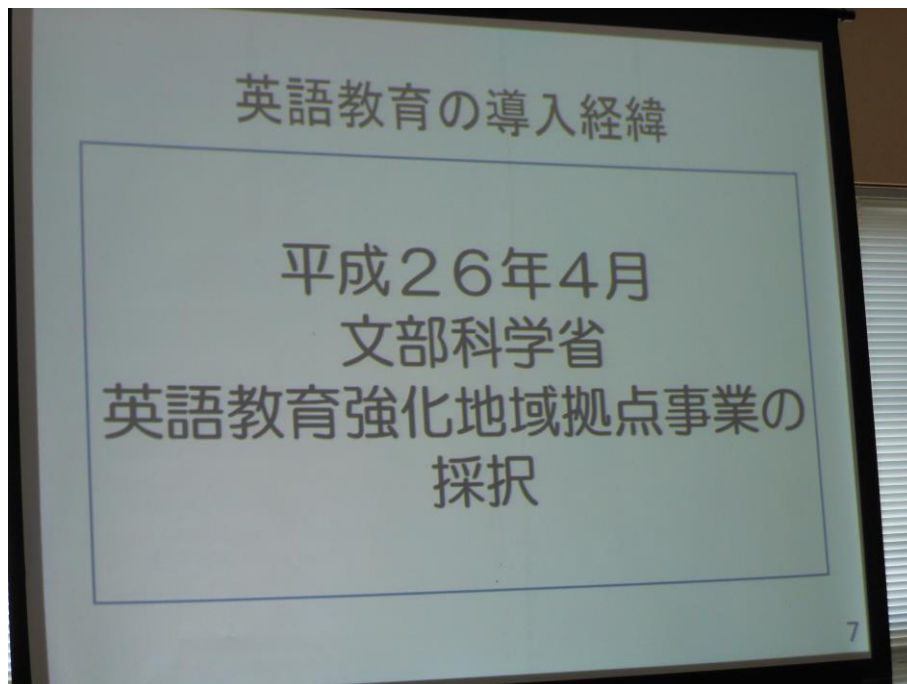
(勝山市)



勝山市教育委員会 梅田教育長 歓迎の挨拶



泉南市議会 竹田委員長 挨拶



担当者より説明



質疑応答



質疑応答



堀口副委員長 お礼の挨拶



勝山市役所前